404号（昭和43年12月10日第3種郵便物認可）　2005年7月1日　（毎月1回1日発行）

総動員伝道

総動員伝道の目標
1. すべての人に福音を伝えよう。
2. すべてのクリスチャンがよいあかし人になろう。
3. すべての教会が成長しよう。

夏だ、キャンプだ

総動員伝道　委員　安藤能成

『イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。……」』マタイ四・19

私の夏はキャンプ。それは小学生のときから今に至るまで変わらない。

牧師の家庭に生まれ育った私にとって、唯一、家を離れる旅行に行けるチャンス、しかも親に喜ばれるのがバイブル・キャンプへの参加であった。私はそこでイエス・キリストを救い主として信じ、献身の召命も受けた。私の所属する教団には同じような経験をしている牧師子弟や若い人々が大勢いる。今までのところ我が教団に毎年新しい教会教師が加えられて来た背景に、キャンプがあると言っても過言ではないと思う。

キャンプとは、言うならば日常を離れてそこに集う人々と一緒に過ごすことである。そして多くの事があるのではなく、シンプルに一つの目的があり、そこにメンバー全員が結ばれている。役割は多種多様有ってもである。バイブルキャンプは伝道と信仰の成長が目的であるので、その役割を担うスタッフが居てキャンパーとともに生活しながら霊的賜物を共有することによってその目的を達成しようとしている。

私もこれまでキャンプ場でのプログラム・バイブルキャンプをはじめ、登山キャンプや外国でのボランティア・ワークキャンプなどを行って、忘れられない貴重な経験をさせてもらった。災害被災地での救援活動などもキャンプ体験に含められると思う。

主イエス・キリストの弟子訓練はまさにキャンプ生活そのものであったと思う。弟子たちは日常生活のなかで一定の時間にキリストの学校に通って学んだのではなく、日常を離れて、舟も網も家族も置いて主イエスのあとについて行ったのである。その目的はキリストの弟子となるためであり、宣教者となり牧会者となるためであった。

主イエスは彼らに教えのことばを語られただけでなく行いを見せられ、一緒に食べ、一緒に眠り、一緒に旅をし、生活をともにすることによって訓育されたのである。主はその目的を達成された。

日常を離れて一つの目的をもって生活を共有するという時間は濃密な経験をもたらす。短期間のキャンプ生活でも、日常に引きずってゆけるほどの関係や成果を期待することも可能である。

キャンプは若い人々だけのものではない。近年、私たちの教会では全年齢層を対象にした、教会独自の交わりを中心にしたキャンプを行っているが、求道中の人が参加して入信の機会となったり、これがきっかけとなって教会のなかに世代を越えた親しい交流が生まれるようになってきた。

夏こそキャンプ。教会の年間プログラムのなかにキャンプを取り入れてみてはどうだろうか。主イエス・キリストはキャンプのエキスパートでいらっしゃる。

伝道メモ 53

観光地に行くとロープウエイに乗る機会がある。ゆらりゆらりと揺られながら、眼下と遠くを眺めることが出来る。ゆられながら、ふと教会における伝道の姿を思い起こした。

ほんのわずかな車輪がロープに繋がり、下にぶらさがっている車体に多くの観光客が乗り込んでいる。これが教会における伝道の姿？そうなのである。ほんのわずかな一部の人が伝道に励んでいるが、大半の人は、その人たちにぶら下がるようにして教会活動をしている。教会の活動を推進しているのはきっと会員の20％に満たない人々の働きに負っているのではないだろうか。

あとの会員は、礼拝を守るのが精一杯でそれ以上のことは出来ないか、しようとしない。

教会内の奉仕活動、献金もそれらの人々によってなされている。あとの人はお付き合い程度に奉仕し、献金している。これが教会の現状ではなかろうか。

これによく似た説明を総動員伝道で用いてきた。それは川くだりの観光船。船頭さんが一生懸命船をこぎ、舵を取り、説明をしている。船に乗っているお客さんはきょろきょろと周りを眺めている。船頭さんが牧師であったり、役員であったり、忠実な20％の人々である。あとの人々は見物人である。この人々を動機付けて、もっと活発に教会活動に加わってくるようになると教会は違ってくることだろう。総動員する体制になると幸いである。見物人ではなく、賜物に応じてある部分を担う人々になることである。

総動員伝道の説明では、船頭さんは牧師である。しかしもう漕ぐことはしない。乗客（教会員）が全員、オールをもって漕ぐのである。牧師はしっかりと方向性を定めて舵をとる。そしてオールをもって漕いでいる人々を励まし、漕ぎ方をコーチするのである。

とにかく、20％の人々を励まし、さらに有効な主の弟子にしていくことが出来たら、いわゆる「ぶらさがり組」も一緒に動いていくことになろう。そのうちに「ぶらさがり組」から20％の中に入ってくる人々が起こされてくるに違いない。

主は遺言で「行ってあらゆる国の人々を弟子としなさい」と言われた。救われてクリスチャンになるというだけでなく、「弟子」としなさい、である。20％の仲間を強化、増殖させよう。

教会を建て上げる喜び 31

（信徒のためのセミナー）

小助川　次雄

第七課『教会形成』の実践プログラムの例（その2）

一、自分たちの現状をありのまま知る現状分析。

さて、教会形成の実践ということになれば、教職者のリードの下でなされることになります。それは、先にも学びましたように、神の教会の秩序です。これからの話も、そのことが前提としてのことですから、誤解のないように願います。

1　教会の現状の整理と分析

自分たちの教会は、どのように形成されてきているのかを、統計的に（年度ごとに）見ます。

信徒総数、現住陪餐会員、他住陪餐会員、受洗者、堅信礼、転入者、転出者、別帳・除名、その他。

また、各集会の出席状況、献金の状況（会計も含めて）。

伝道活動、イベントその他の活動の実施と結果などについて。

前にもお断りを繰り返して来ましたが、このようなことを考えることは世俗的であり、霊的でないという考え方があります。また、このようなことは、あくまでも一面の状況でしかないが、自分たちが何をし、どのような結果を得ているのかを吟味する助けになると考えることもできます。それぞれの信仰と考え方によって違いがあります。各教会の責任教職の日頃の指導によって判断してください。

一般にどんな道具や方策でも、その用い方によって有用となり、あるいは、無用ともになります。場合によっては、有害ともなります。問題は、どの道具でも、その本来の性質や用途を正しく理解し、正しく応用するかどうかではないでしょうか。

2　分析結果の取り扱い方

このような分析で得られた結果はあくまでも参考資料です。数字は正直とも言われますが、統計は、すべて、ある条件の下でなされている作業ですから、そのまま一般化や絶対化をしてはいけません。ある手順によれば、こういう見方もできます。

①　非難や責めるためでなく、現状を一面から知るために用いる。まず、ありのまま、受け止める。

②　その上で、何か反省し、あるいは、推進する点や事項はないかを考える。（続く）

◆ジョン・ウェスレーと日本伝道

姫井雅夫

一昨年はジョン・ウェスレーが生まれて300年になりました。というわけで各地で記念の集会が行なわれました。

日本にもウェスレーと深いかかわりのある教団、団体があります。ウェスレアン・ホーリネスをはじめ、インマヌエル、日本イエス、フリー・メソジストなど。さらにジョン・ウェスレーに学ぶ会、日本聖化交友会、ウェスレー・メソジスト学会など。

ジョン・ウェスレーは1703年6月17日に牧師の家庭に生まれ、1791年3月2日にこの地上の生涯を閉じています。臨終の床で、周りに集まった人々に「大切な事は主が共におられると言う事だ。インマヌエル」と言って息を引き取ったとのことです。

彼が生まれた時代は、霊的に大きな変革が起こっていた時のようで、アメリカでもヨーロッパでも信仰の覚醒運動が広がっていたのです。ピューリタン運動、敬虔主義運動などがそうです。

ジョナサン・エドワードやホットフィールド、ツィンツェンドルフなどと同時代のリーダーでした。

英国国教会が伝統的な流れで腐敗していた時に神が起こしてくださった特別な器だったと思います。彼が進めた改革は多岐にわたっています。聖書信仰、福音信仰、宣教の拡大、弟のチャールスとともに賛美の強調、政治的にも奴隷解放や刑務所の改善などを行なったようです。福音はまさに人を変え、世界を変えます。

彼の一番の功績は聖霊信仰に基づく「聖化」の神学的整理ではないかと思います。過去の罪を悔い改めて「新生」の体験をしてクリスチャンとなります。彼はこれを第一の転機とし、その後、クリスチャンの中に存在する罪の性質に目を留め、これを聖霊の働きによって「聖化」することの必要性を強く勧めました。これを第二の転機と呼んでいます。

学生時代からホーリー・クラブを結成し、信仰者が規律正しく（メソジカルな）生活し、あかしすることを強調しました。そのため周囲の人々から「メソジスト」とあだ名されたのです。初代教会のクリスチャンたちはアンテオケで「キリスト者」と呼ばれるようになった（使徒十一・26）とありますが、それと同じようにメソジストと呼ばれるようになったのです。

時代の流れに妥協するクリスチャンではなく、はっきりと信仰を表明し、それに沿った実生活を強調したのです。

ヤコブは「行ないによって私の信仰をあなたに見せて上げます。行ないのない信仰は死んでいるのです」（二・18、26）と言っていますが、彼もそのように教えました。

ウェスレー・メソジスト学会会長の岩本助成師は、ウェスレーの今日的意義として「バランス」を上げています。

1、個人と教会
2、内面と儀式（恵みの手段）
3、個人伝道と大衆伝道
4、教職者と信徒
5、説教と聖餐式
6、巡回と定住

最近は日本でもカルト的な教会が増えてきていると聞いています。個人よりも教会に重点が置かれ、家庭を破壊しても教会を重視させようとしています。信徒よりも教職者に権威をもたせ、その権威を振りかざそうとしています。

また信徒も牧師を自分の都合の良いように使いたいという風潮が見られます。いわゆる「便利屋」を牧師に期待しているようです。引越しと言えばトラックを運転してくれるし、病気だと言えば車で病院へ連れて行ってくれるし、農繁期には田植えも稲刈もしてくれます。もちろん出来る事は何でも喜んでしてくださるでしょうし、牧師もしてあげたいと思っているでしょう。

牧師にはいつ教会に行っても居てもらいたいし、話の相手になってもらいたいようです。牧師は遣わされている教会に一番の責任を負っていますが、同時に主から委ねられている福音を「全世界に出て行ってすべての造られた者に」伝える使命をも与えられています。お互いの間の節度が問われます。

これら両極端な事例を挙げましたが、バランスが大切です。

その意味で、上の段にあげられている6つの分野は大切な課題だと思います。今の日本の教会が具体的に直面している種々の問題にウェスレーがもたらした光は解決に糸口を提供しているのではないでしょうか。ウェスレーがもっていたあのバイタリティ、馬背にまたがってどこにでも福音宣教のために出かけていった救霊の情熱、「一書の人」と言われていますが、豊富な学識、神と人とに仕えていった使命感、社会的にも大きな感化を与えた影響力、現代のウェスレーを必要としています。

●献金者ご芳名
2005年4月～5月
（敬称略・順不同）

〈教会〉
日本宣教会代田、国際基督代々木、久我山宣教会、一麦、東京国際基督、JEC千代田福音、聖教会インターハートチャペル、横浜福音、シオン・キリスト蒲田、富士宮栄光キリスト、本郷台キリスト、小川イエス福音、兄弟団成増、富士見キリスト、白鷹キリスト、長井、荻窪栄光、松本キリスト、インマヌエル福井、湘南、横浜シオン・キリスト、池の上キリスト、一麦西宮、腰越独立、同盟世田谷中央、日基赤坂、大阪一麦、金沢中央、三ツ境キリスト、同盟大井、佐渡金井キリスト、名草キリスト、ニュージーランド日本・大阪、みもみキリスト、久遠キリスト教会伝道グループ

〈団体〉
アチーブメント（株）、呉朝祷会、（株）ヨーゼフ

〈個人〉
松見睦男、林冨貴子、岡本良二、羽鳥明、岩崎ひとみ、山崎博美、山崎正子、砂川富子、森山信子、栗原義忠、村上隆三・妙子、北條和人・孝子、並木サイ、深沢新明、田中進、鴨藤弘、池田ルイ子、中山勲、尾原尚子、浅野浩一・和子、深谷春男、二輪謙太郎・たか子、内山繁実、中島章裕

夏季献金のお願い

財務　塩島光三

21世紀を迎え5年を経過した今日、キリスト教界の進むべき指針が示される環境が整って来たことと受け止めます。

そこで総伝も日本の宣教に対する重荷を自覚し21世紀の超教派宣教の進むべき指針を明らかにしていかねばなりません。

そこで15年振りで再開される首都圏キリスト教大会に参加し沈滞した首都の教会の宣教に聖霊の真水を注ぎ込み活力を甦らせること。

また今年もキャンパス・クルセードの応援を得て三重県南部志摩地方のトラクト配布、西千葉方面の教会の協力による西千葉総伝、埼玉南方面の総伝と推進される計画に必要な財が備えられますように皆様のご理解とお力添えをお願い致します。

年間3万数千人と言われる自殺者と止まる所を知らない犯罪の激増、天災人災に怯え、誤った教えに捕らえられ不幸な道を辿っている人々に真実な道を示すためにも総伝の活動が必要であります。その働きを支える献金の御支援を宜しくお願い致します。

教会こぼれ話
◆第六三話

QTを大切に

私たちの教会ではこの2月の総会の議を経て、4月から「日々のみことば」（発行、編集者＝趙南洙）を用いることにした。まだ2ヶ月足らずだが、効用は現れてきているように思う。

QTとはQuiet Timeの略で、「敬虔の時間」と呼ぶ（6月号4面参照）。このQTの助けとして「日々のみことば」を選んだ。日々の日課に従って聖書を読み、黙想し、教えられたことを書き込み、祈るのである。そこには解説もあり助けとなる。

私たちの教会ではこの4月から日曜日の時間帯を9時から教会学校子どもクラス、10時から成人クラス、そして11時から12時を礼拝の時と変更した。この成人クラスの中で当分QTの時を持ち、「日々のみことば」の分かち合いの時を持つことにした。その日の聖書箇所を読み、互いに教えられたことを分かち合い、ともに祈るのである。時間帯の変更や新しいことへの戸惑いもあるが、牧師も信徒も一緒に敬虔の時間を持ち、同じ聖書箇所を読み、教えられることはすばらしい。

それぞれの教会が自分たちにふさわしいものを取り入れ、互いに成長し合って行くものでありたい。

住吉英治

●ご支援、感謝いたします。

今月も皆様から尊いご支援をいただき、心から感謝申し上げます。赤字がだいぶ解消されました。感謝します。

今月は三重県の志摩市でトラクト配布をします。韓国から7名がボランティアとして応援に駆けつけてくださいます。中部国際空港に着きます。そこからレンタカーで志摩市に向かいます。4日間の予算を切り詰めて20万円としてみました。すでにこのために3万円を捧げてくださった方がいます。ハレルヤ。

みなさんの教会でのキャンプや夏季の諸活動が主に用いられますように。

4月会計

収　入	561,566
活動費	64,278
ニュース印刷発送	133,964
部屋代	195,555
人件費	0
積　立	10,000
支出計	403,797
累　計	−90,349

2005年7月1日発行
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2−1
OCC、614号室
総動員伝道
03−3291−5035
03−3291−5266
Eメール　sodoin@ybb.ne.jp
ホームページ
http://www.gospeljapan.com/sodoin/
振替　00140−1−107255
代表　姫井　雅夫
編集　住吉　英治
定価　一部10円（送料別）
印刷　新生宣教団（2,500枚）